

## 県医活動報告

### 平成23年度 女性医師支援事業連絡協議会

日時：平成24年2月17日(金) 午後2時～同午後4時50分

場所：日本医師会館3F 小講堂

報告：常任理事 三倉 剛

#### 次 第

司会：常任理事 保坂 シゲリ

開  
会  
議

女性医師支援センター センター長 羽生田 俊

1. 「女子医学生，研修医等をサポートするための会」事例発表 I

- ①青森県医師会
- ②東京都医師会
- ③神奈川県医師会
- ④愛知県医師会

(①～④についての質疑応答)

－ 休 憩 －

2. 「女子医学生，研修医等をサポートするための会」事例発表 II

- ⑤島根県医師会
- ⑥岡山県医師会
- ⑦広島県医師会
- ⑧愛媛県医師会
- ⑨鹿児島県医師会

(⑤～⑨について質疑応答)

3. 質疑応答（全体）・総合討論

閉 会

◇資料発表 : ⑩兵庫県医師会、⑪徳島県医師会、⑫福岡県医師会

まず保坂常任理事の司会挨拶，担当羽生田副会長の挨拶あり。

その後の議事は，9件の事例発表（9県医師会からの女子医学生・研修医等をサポートするための会事例発表+3県医師会の資料発表）と意見交換。

大分県医師会は『大分県女性医師の会』を中心に，女性医師のキャリア形成にかかわる問題点抽出のためのアンケート調査および大分大学での過去3回の女性医師支援シンポジウムや市内ホテルでの講演会等を主催している。こうした活動は，今回の各県事例発表を見ても標準的と思われた。

ただし各県とも対象となる女子医学生・研修医等を講演会・シンポジウムに参加させること(人数集め)に苦労しているようだ。当県も例外ではない。まして、対象枠を広げて男子学生・男性医師に参加してもらうことは一層困難を極めていた。そのなかで、青森県医師会が比較的人数確保していたのは、地方にあって一県一医大であり、大学の協力を得て大学で開催していたことが大きいという話であった。このことは大分県にも当てはまり、同様の取り組みですすめている。開催を学生の参加しやすい日時にすること、地域医療学等の医師確保に熱心な教室の講義枠や単位取得を利用すること、先輩・同僚等のロコミ強化が有効とのことであった。産業医の単位講習の場を利用したらよいとの話もだが、補助金の関係でプログラムを産業医学とうまくリンクさせないと事業化は難しいようだ。

岡山大学と山口大学は学生レベルで自発的に女子医学生・研修医等サポートするサークルができており、それらが自主的に会を企画開催している。医師会は他県サークル学生の旅費を援助する等のサポートをしていた。こうした将来援助を受けるであろう対象者が自分たちで企画運営するのが一番効率的で有効であると思われる。また、単なる講演よりもスモールグループディスカッションが問題認識に有効であるという。女性医師問題は全体の問題であると同時に、個別の問題である。とくに問題を抱える女性医師は、切羽詰って問題に取り組むため、人のことより、私のこととして行動せざるを得ないからである。一般的にこうだ、あるいはこうあるべきといった話より、今の職場、今の医局、今の人間関係が問題になり、それは個別に事情が違って一般論では処理しきれない。そこで身近な同僚、先輩を頼るという形になる。しかしこれだけ女性医師が増え、近くに相談相手のいない女性医師が増えてくれば、公に救う機関が必要になる、その一つが日本医師会女性医師バンクであり、コーディネーターの活躍で、解決ケースが丸5年で300件に達した成果につながったのであろう。大分県の場合、多くは『大分県女性医師の会』の谷口会長の個人的ご尽力によるところが多いので、今後は会として支えていく体制が必要であろう。個別に解決点を見出すということに関しては、県全体の講演会という形式よりも、各医療機関を訪ねて、相談業務を行うといったきめ細かい活動をしている県(青森県)もあった。参考になる話である。

私が担当理事として常々思うことは、ケネディの言葉に尽きる『誰かが何かをしてくれるのを期待するのではなく、自分が誰かのために何をできるか求めよ』である。

女子医学生や妊娠出産する若い女性医師は助けてほしいと希うばかりでなく、日頃からこうした問題に関心を持ち、自らのキャリア形成において今何をすべきか、ひいては女性医師全体のため、日本の医療のために何ができるかを考えて行動してほしい。そうした意識付けを大学教育や高校の職業教育レベルから行っていくことが肝要と思う。またこうした問題は女性医師だけの問題ではなく、家庭や職場のパートナーとしての男性医師のキャリア形成とも深くかかわっており、女子医学生や女性医師とともに考えていくべきことを早い段階から意識付けすべきである。医師会ができることはその仕組みづくりとサポートのみであると考えている。

われわれは今後も、過去行ったのと同様の活動を大分県医師会サポートの元『大分県女性医師の会』中心に続けていくが、今述べたように地道な息の長い活動なしには、いつも参加者不足という残念な結果を招くことであろう。